

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

顔は、たしかに自分の身体の一部だ。

しかし、自分では直接見ることができない。

その顔を少し変化させると、周囲の反応ががらりと変化する。

顔は身体の中で、そうした反応を作り出せるとも不思議なパーツだ。

だが、僕は、顔だけではなく他の身体パーツについても、いろいろな「不思議」を感じる。

たとえば、身体はどこまで自分のものなのだろうか。

髪を切った時、その髪は自分の所属物なのか、あるいは単なるモノになるのか。

相撲の断髪式を見ると、ただのモノではない。あきらかにその人の大切な所属物として意味を持っている。

では、切った爪は自分なのか、そうではないのか。

何をもって「自分」というのか。

自分の身体の境界線は、どこにあるのか。

そんなことを考えるようになったのは、パラリンピックに出ている選手たちと接するようになってからだ。引退前の4年間、たまたまアメリカでパラリンピアンと同じグラウンドでトレーニングをすることになった。

たとえば、義足とは何なのだろうか。もちろん、血が通っていない、製造された物体ではあるけれど、でもただのモノとは違う。義足をつけた選手は、トレーニングをしていく中で、その義足を自分の身体の一部として感じるようになるという。

「モノの自分化」と言えはいいのだろうか。

50年くらい先には、パラリンピアンはオリンピックよりも速く走る、という予測がある。というのも、さまざまな技術が駆使されて、義足の素材や性能が今よりもぐんと高まるからだ。この先はますます製造技術が発展し、器具が自分の身体として溶け込んでいくだろう。

パラリンピックの選手たちを見ると、身体についてさまざまなことを気付かせてくれるし、学ぶことができる。一緒に練習すると、人の骨組みがどのように組み合っていて、動きとどう関係しているのかを知ることができる。たとえば、「右ひざが曲がらない状態で走ると左手のふりがすごく大きくなる」といった身体の中でのつながりを、現場で見たりするのだ。

視覚に障害のある選手が、僕の横で幅跳びの練習をしていた。

視覚を使わずに、踏み切り板までの距離をはかり、ジャンプするタイミングを掴むためには、どうすればいいのだろうか。

観察していると、走る時のピッチ・歩幅と歩数のコントロールを、リズムを使ってやっていた。リズムで、距離を測っていたのだ。

一般的に、「走る」ということと「リズム」とはつながらない。けれども距離を測るためには、なるほどリズムは手がかりになりそうだ。

走ることに長けていた黒人の選手たちはどうか。常にリズム感覚を身体の中に持っていて走ることには活用していないだろうか。走ることとリズムとは、案外深い関係があるのかもしれないと、パラリンピオンの練習を見ていて思ったのだ。

僕は目をつぶってみた。

いつもは目から入ってくる情報がとても多くて、視覚に依存している。

しかし、視覚をいったん遮断すると、自分の内側に意識が向かう。手に物を持つだけでも、「あつ、こんな感触だったんだ」ということが際立ってくる。

地面に足がついた瞬間の足の裏の感触を、いつもよりも細やかに感じとれる。衝撃や、腰に響いてくる感じが鮮明になる。

レースでは頭でいちいち考える前に身体が動かなければならない。

感覚的、身体的な経験がたくさん積み重なっていくと、それが経験的な知恵になり、瞬間的な判断になっていくのだと思う。教科書通りの練習をしていればある一定のレベルまではたどり着くことはできるだろう。でも、さらに身体感覚を極めていくと、教科書には書いていない問題にぶつかる。

その領域に入ったら、だれも教えてくれない。

答えは、自分自身の身体の中から探し出すしかないのだ。

まだまだ使っていない感覚がたくさんあることに僕は気付いた。

僕は、パラリンピオンから、いくつものヒントをもらうことができた。

(為末大 『遊ぶ』が勝ち 『ホモ・ルーデンス』で、君も跳べ！)

※設問のために一部改変

問い一 本文を二〇〇字程度で要約しなさい。

問い二 身体感覚を極めていくことは、あなたにとってどのようなことに役立つと考えますか。
二〇〇字程度にまとめて述べなさい。